

戦場の声

—— 片柳鯉之助の『遠征日誌』について ——

大 濱 徹 也

は じ め に

近代日本が国家の命運を賭した戦争の実態認識についてはいまだ充分になされてはいない。戦争が「戦史」や「軍事史」的視角において記されることはあっても、¹⁾ 戦争の遂行者たる国家と被治者たる民衆がどのようなかたちで戦争の加担者であったかについて明らかにしたものはとぼしい。いわば、戦争が民衆生活におとす翳を把握し、民衆にとって戦争とはいかなるものであったのかを問い、戦争体験がどのようなものとして形成され、かたりつながれていったかということの検討はこれからの課題である。こうした戦争の実態についての把握をこころみるためには、戦場での体験を記した兵士の歌や手紙、日記の類がつかえる「戦場の声」ともいうべきものを発掘する²⁾ とともに、戦場で斃れた兵士たちの世界を戦役記念碑や忠魂碑・忠霊塔などを検討することによってあきらかにしなくてはならない。³⁾ そのためには兵士たちの戦いの記録をはじめとする戦友譚や生活誌にかかわる諸記録が発掘されねばならないわけで、本稿はこのような立場より東京都下青梅市御嶽山で発掘した一兵士が綴った日清戦争従軍に関する記録を紹介せんとするものである。

2

日清戦争は、後の日露戦争に比べれば、きわめて小規模なものでしかな

いが、はじめての本格的な対外戦争であっただけに、戦争を前にした国内の空気はそれなりに切迫したものがあつた。開戦をめぐる国内の空気や戦闘経過についてはすでにのべたこともある⁴⁾ので、ここでは記録を理解するのに必要なだけの戦争経過について参考までに概観しておくこととする。

日清両国は、朝鮮市場と宮廷における指導権をめぐるその確執を深め、対決への歩みを進めていた。明治15(1882)年、ついで17年の「京城の変」以来、日本は清国を想定敵国とする対清軍備力の強化に努めるなかで、両国の関係は防穀令事件(明治22年)、清国北洋艦隊の来日(明治24年)、金玉均暗殺事件(明治27年)などの諸事件のなかできびしさをまし、日本国内では小国日本の前途を憂える声がかまきり、清国に対する敵愾心が「ヤッツケロー節」などにたくして吐露されもした。それだけに、開戦の報は、老いたりとはいへ大国清を相手とする戦争だけに、民衆を不安にさせ、精鋭を誇った近衛師団の青年将校の顔色すらも変えさせたという。⁵⁾

明治27年7月23日払暁、大院君は龍山在營の日本軍2個大隊に擁されて摂政に就任、日本の企図した「内政改革」を約した。すでに6月5日に設置されていた大本営(幕僚長・有栖川宮熾仁親王)は、8月5日に宮中に移され、さらに全軍を統帥するにふさわしい拠点として広島へ移されることとなり、明治天皇は9月15日広島大本営に入った。

朝鮮では、国内の戦争体制がととのえられているとき、野津道貫指揮下の第五師団が京城に集結、さらに第三師団(師団長、桂 太郎)も動員され、9月1日には山県有朋の下に第一軍が編成された。この間、平壤攻略をめざして進んでいた第五師団は、9月6日に平壤を占領、ついで第一軍諸隊の集結をまって体制をととのえた後、鴨緑江を渡河、12月13日には海城を占領した。

海上では、制海権の獲得をめざす連合艦隊が9月17日に黄海で清国艦隊と対戦、清国が誇った北洋艦隊の主力たる経遠、致遠、超勇を撃破した。この勝利は「黄海及渤海に於ける制海権の獲得」⁶⁾にはかならず、参謀本

部は、「日本国軍作戰大方針」にもとづいて、「陸軍の首力を渤海湾頭に輸送し直隸平野に於て大決戦を遂行」⁶⁾ せんと企てた。

そこで9月26日、第二軍が大山 巖司令官の下に、第一、第二両師団を中心にして編成された。このとき第一師団の師団長は山地元治中將で、8月30日に動員令が下り、師団司令部は9月25日に青山停車場より広島へ向った。この様子は第一師団司令部の鉄道輸送指揮官亀岡泰辰の従軍日記『日清戦袍誌』につぎのように記されている。

明治廿七年甲午

九月二十五日 火曜 晴 本夜十二時を以て第一師団司令部は青山停車場臨時軍用停車場を發し広島に向ふ。是より先き九月十九日に於て師団長は左の命令を發す。

第一師団命令 九月十九日午後八時
東京師団司令部に於て

- 一、当師団は海外へ出戦の目的を以て来る二十二日より広島に向て鉄道行軍をなす。
- 二、各部隊鉄道輸送の細部は別表に示す。
- 三、予は二十五日夜十二時青山発の汽車にて広島に至る。

第一師団長 男爵 山 地 元 治

午前九時師団司令部構内に於て管理部下士以下の武装検査を為す。
予は本日師団司令部の鉄道輸送指揮官を命ぜらる。

午前十一時より陸軍省に至り児玉陸軍次官以下に暇乞を為し、十二時師団司令部に於て留守諸官と留送別の小宴を催す。夫より和崎輜重兵大尉を随ひ青山停車場に至り停車場司令官騎兵大尉秋山房次郎と輸送上の協議を遂げ三時頃番町の私宅に帰る。親戚知友の来り行を壮にするもの多数あり。

午後九時より青山停車場に赴く。同所に送り来る者親戚知友多し。
十時より積載を始め四十分にて終る。其搭載人馬並に荷物左の如し。

將校 二五 下士以下 一四六 計 一七一

馬匹 九五 鞍 二七 行李 三〇駄

十二時に至り予定の如く汽車青山停車場を発す。日本赤十字社総代花房義質以下各区より総代等を出し送る者数多、又夜間に係はらず沿道各駅にも見送人衆多来集、

山北に於ては赤十字社支部より麦湯の寄贈あり、斯の如く一般人民は軍隊の行を壮にし優遇を為せり。

第一師団の属する第二軍の諸部隊は大同江沖に集結後、遼東半島の一角花園口に上陸、金州をめざして前進、11月6日金州城を陥して大連湾を占領、22日には堅城を誇った旅順要塞をわずか一日で攻略し指揮官乃木希典はその武名をあげた。⁷⁾ 乃木の雄姿は片柳鯉之助の『遠征日誌』がよく記している。

ついで蓋平作戦に従事、28年3月9日、第一、二軍は相呼応して田庄台を攻略、直隸大作戦を遂行し、雌雄を決せんとした。田庄台の戦闘は全戦闘のなかで最も激しいもので、「敵兵血潮に苦しみ、民家に投ず。我軍之に放火す」(明治28年3月15日付片柳功三宛片柳鯉之助書簡)というような戦いがくりひろげられていた。そのため人口1万の繁盛な街は、「今は荒涼たる廢墟となった。まだ燻って居る家屋があり、冬籠りのため繋船してあった数百の舟も焼けた。街上には戦死者がごろごろして居り、兇暴な瘦せ犬が死体を漁り歩き食てゐた」⁸⁾ という。奉天在住の宣教医師クリステイーは廢墟の街にたたずみ、亡国の民となった中国人の運命に思いをはせた一人であった。

日本軍は、これらの勝利をふまえ、決戦にむけて戦備をととのえた。しかし、その間に下関でおこなわれていた伊藤博文と李鴻章との講和談判は3月30日に休戦条約を締結することとなり、4月17日に講和条約を調印、21日に平和克服の詔勅を渙発、戦いの幕をとじた。諸部隊は、台湾に転戦した近衛師団をのぞき、帰還の途についたのである。

3 『遠征日誌』と片柳鯉之助の戦時生活

『遠征日誌』を記した片柳鯉之助は、慶応2年4月19日、武蔵国西多摩郡

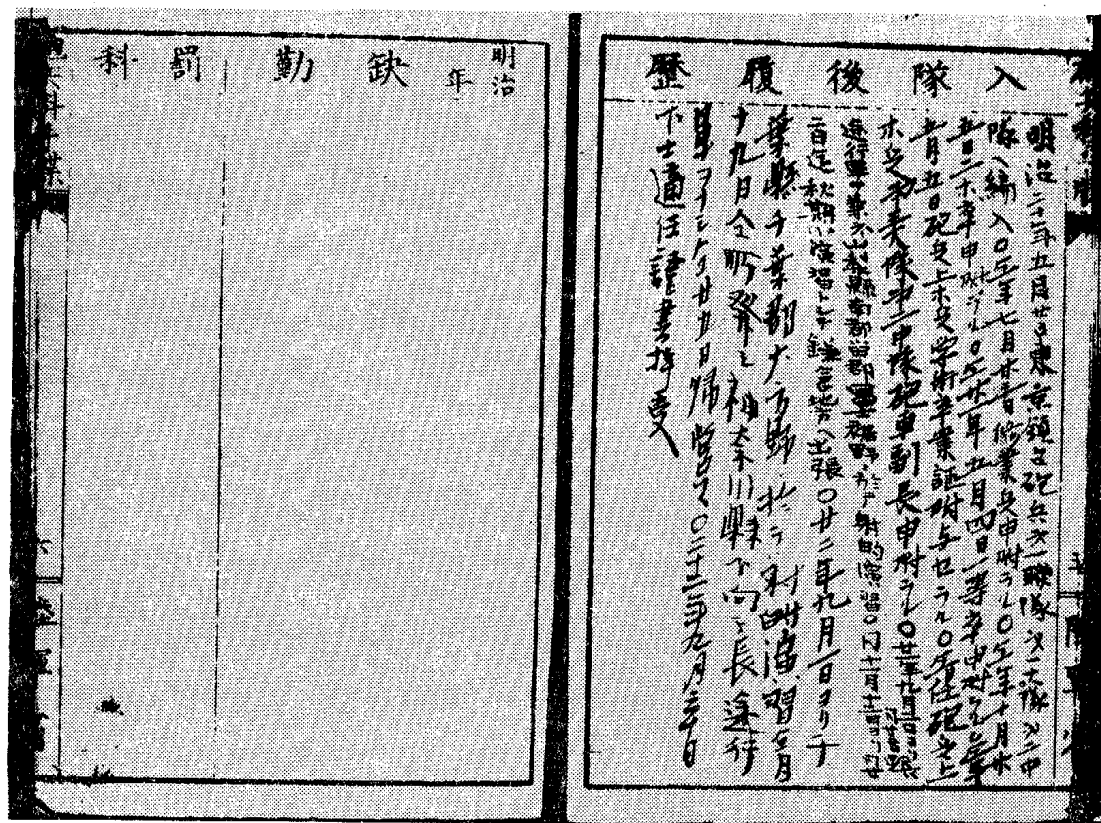
御嶽山（現東京都青梅市御嶽）に父片柳功三、母原嶋弥平長女ケイの長男として生れた。鯉之助が所持していた『砲兵科手牒』に記され戸籍には父

持ス可シ若シ破損又ハ紛失等スルトキハ其罰ニ處スル而巳ナラズ其代價ノ償ハシム可キ事明治二十五年五月廿日 中隊長 陸軍砲兵大尉長沢子之助		三陸軍	
砲兵第一大隊第三中队		姓名	
戸主		片柳 實之助	
祖父 片柳 實之助		祖母 大野 実三ツカリヤ	
父 片柳 實之助		母 大野 実三ツカリヤ	
妻 大野 実三ツカリヤ		子 大野 実三ツカリヤ	
男 大野 実三ツカリヤ		女 大野 実三ツカリヤ	
住居 大野 実三ツカリヤ		年令 明治二十五年五月廿日	
氏神 大野 実三ツカリヤ		備考 大野 実三ツカリヤ	

[illegible]

の職業が「平民雑業」となっており、鯉之助も「同」となっているが、「平民雑業」の内容は御嶽に奉仕する御師を意味していた(27頁写真参照)。鯉之助が信仰厚い御師であることは冷てる戦場で「我氏神ノ大祭日ニ付キ早朝庭ニ出テ遥拝セントス。面ヲ洗フノ水ナシ。不止得雪ヲ以テ面及手ヲ洗ヒ東方ニ向イテ遥拝ス」(明治28年3月7日)のような姿にうかがえるように、故山の神へよせる思いは深い。

鯉之助は、明治20年の徴兵検査において、「明治20年第25番」の「名簿番号」をもらい、籤番号は第9番であった。そして、5月20日入隊、東京鎮台砲兵第一聯隊第一大隊第二中隊に編入され、22年9月30日に帰休除隊となった。結婚は、除隊後の明治26年2月10日で、原嶋万五郎長女トヨ(明治9年11月1日生)を妻とした。



その人相は、『砲兵科手牒』によると、「幹 五尺五寸一分」「顔 大ニシテ長」「額 広クシテ長」「眼 中」「鼻 大ニシテ隆」「口 中」「頤 稍長」「髪 密黒」「眉 太クシテ短」「痘 種、明治廿年六月六日種不感」と記されており(27頁写真参照)、なかなかの違丈夫であったことがうかが

える。つぎに、『砲兵科手牒』に記された兵歴を記せばつぎのようなものとなる。

『入隊後履歴』(28頁写真参照)

明治二十年五月廿日東京鎮台砲兵第一聯隊第一大隊第二中隊へ編入 同年七月廿三日修業兵申付ラル 同年十月廿五日二等卒申付ラル
同廿一年五月四日一等卒申付ラル 同年五月五日砲兵上等兵學術卒業証
附与セラル 同日任砲兵上等兵第三大隊第二中隊砲車副長申附ラル 廿
一年九月二日ヨリ同廿二日マテ長途行軍ヲ兼ネ山梨県南都留郡富士裾野
ニ於テ射的演習 同十一月十二日ヨリ同廿二日迄秋期小演習トシテ鎌倉
地方へ出張
廿二年九月一日ヨリ千葉県千葉郡大方野ニ於テ対射演習, 同月十九日同
所発シ神奈川県下向テ長途行軍ヲナシ, 同廿五日帰營ス 二十二年九月
三十日下士適任証書拝受

『褒 賞』

明治廿八年十月三十一日明治二七, 八年戦役ノ功ニ依リ勲八等瑞宝章及
金五拾円ヲ授ケ賜フ

『褒賞休業』

二十一年六月十五日二百五十日精勤ニ付十八日間褒賞休業免状下賜ル
同年十二月廿三日二百五十日精勤ニ付十八日間褒賞休業下賜ル, 休業中
帰省
廿二年四月十二日二百五十日間精勤ニ付廿一日間褒賞休暇免許下賜 廿
二年七月十八日ヨリ廿一日間褒賞休業下賜帰省

『精勤証書』

明治廿二年九月二十九日精勤証書ヲ下賜サル

『満役或除役』

明治廿二年九月三十日帰休除隊

『予備軍後備軍中履歴』

明治廿四年一月四日簡閲点呼済

明治廿四年四月廿五日学術科復習ノ為メ召集，同五月十六日解散
廿五年二月点呼済
廿六年八月簡閲点呼応ス
明治廿七年八月三十日充員下令，同三十一日野戦砲兵第一聯隊へ入隊，
即日弾薬大隊砲兵第二縦列へ編入，九月十八日被任砲兵二等軍曹，十二
月廿日被任砲兵一等軍曹
明治廿八年度簡閲点呼ニ応ス
明治廿九年度簡閲点呼ニ応ス
明治三十年六月十日後備役演習復習ノ為メ第一師団野戦砲兵第一聯隊第
六中隊へ召集，同月二十四日演習済，解散ヲ命セラル
明治三十年度簡閲点呼ニ応ス
三十一年度簡閲点呼ニ応ス

4

片柳の日記は，第一師団の将校として輸送指揮にあたった亀岡泰辰の『日清戦砲誌』（昭和8年 偕行社）が戦争の経過を事務的に記録しているのとは異なり，きわめて旺盛な好奇心でもって，戦場への行程で見たさまざまな風物をはじめとし，戦闘の諸相を綴るなど，その内容は個的な体験にもとづく見聞でしめられている。その筆致は，片柳がいかにも人間的魂力にとんだ男であるかをよくものがたっているとともに，鋭い眼力の持主であったことをつたえている。

このような記録をものした兵士片柳鯉之助の心情は，多くの兵士たちに通有なもので，故郷を離れ，その生涯ではじめてとっていいような大きな旅をする民衆が新しい土地に対していただく不安と関心がおりなす思いによって生み出されものにほかならない。そのような兵士の思いは，鯉之助の場合，故山の神々へ寄する祈りとして表わされたし，はじめて足をしるした異郷での見聞を克明に肉親知友へ書き送るなかで，未知なる体験を己

のものとしていくことで深められたのであった。片柳の見聞記が臨戦地広島からのものをはじめ、その内容がいかに豊かなものであり、人間味あふれているものかはその書簡からうかがえよう。

其後ハ御無音多罪ニテ時下 禾(秋) 冷ノ候各位御起居如何、定メテ御清康ノ事ト奉遠察候。小生着広以来幸ヒ無事乞フ御消慮アレ。俸テ当地ノ形況ヲ聊カ略記シテ諸君ニ御報スル左ノ如シ

一 軍事ハ元来機密ナレハ伺フ能ハサルモ、出帆時限凡本月中旬ナランカ。当地目下軍人及臨時帝国議会開設ニ際シ殆ント立錫ノ余地ナキカ如シ。軍人賄料ハ将校卅三錢、下士以下二十二錢ニシテ総テ宿舍ニ任せタリ

一 地形ハ平亘ニシテ四面山岳峙立セリ。市ノ中央ニ四条ノ川アリ。軍輸ニ便ナリ。此川タル深ハ一流ナルモ市ノ上端ヨリ四条ニ堀割セシモノナリト云フ。本流ハ広島ヲ去ル一里強、宇品港ニ注ク。川名ヲ三条川ト云フ。宇品ニハ先般海戦ノ際多少損破セラレタ有名ノ西京丸目下ハ碇泊セリ。小生過日宇品ヲ見物セリ

一 大本營ハ市ノ東北端ニシテ旧城ノ有スル所、周囲ハ第五師團ノ兵營ナリ

一 宮島ハ広島ヲ離ル五里余ニシテ、陸ヨリ一里、海路アリト云フ。当町ノ西南ニ位スル凡一ノ島ナリ。小生見物ヲ希望スルモ軍隊ノ規律犯スヘカラス。遺憾千万ナリ。

一 気候ハ東京ト大差ナキモ蚊ノ多キニハ閉口セリ

一 当地魚類ハ先ツ充分ナリ。牛肉一斤七八錢位ナリ

一 食物ハ概シテ調理アシク、小生等ノ宿舍如キハ醬油ヲ用ヒス、多ク味噌ノ溜リヲ以テ代用ス。故ニ物品ニ比シテ風味甚タ悪シ。

一 語ハ解シ難キ事度々ナリ。先ツ西濱老母ノ語調ト同一ナリ

一 風俗ハ大差ナキモ先ツ「ヤボ」ノ方ナリ。魚売り等大概女子ナリ

一 当地ハ多少松タケヲ産ス。蓋シ備前地方ヨリ芸州地方ノ山岳ハ不残松林ニテ他ノ樹木ナキガ如シ

- 一 備後国尾道ト称スル所ハ^{ヲノミチ}壺表ノ本場ニシテ風景最モ佳ナリ。且海岸ニシテ運輸便ナリ
- 一 当方鉄道ハ山陽鉄道ニテ六月中竣工セシヨシ。既成ハ広島迄ナリ。
- 一 芸備地方ハ家屋ノ構造総テ小キ方ナリ。然レトモ屋根ハ田舎ニ至ルモ多ク瓦ヲ用ヒタリ
- 一 市中目下ハ各戸軒提灯日旗等ヲ出シ宛然大祭日ノ如シ
- 一 諸官衙ハ比例的の中等ニ見受タリ
- 一 平民ノ待遇ハ先ツ普通ナリ
- 一 風景ハ佳ナリ
- 一 養蚕ハ近来多少開ケ初メタルヨシ
- 一 作物ハ平年比シ悪キ方ナルヨシ
- 一 米価ハ白ニシテ一石十一円位
- 一 当地ハ籃ヲ産シ又商家ハ縫針ヲ製造スル者余程見受タリ
- 一 小生ハ元来蕎麦ヲ好ムノ性ナリ。然レトモ其マヅキニハ大閉口
- 一 物価ハ総テ騰貴セシヨリ、卵一ケ二銭、酒上等廿五銭、下等十八銭、鯛五六以上尺以下凡三十銭、車賃東京ヨリ高シ。ビール、ブドー酒ノ如キハ一瓶ニ付東京ヨリ三銭程高シ
- 一 出雲大社へ当地ヨリ四十里ナリト云
- 一 東京ヨリ広島間ニテ一等米田ノ宣敷ハ備前岡山地方ニ見受タリ
- 一 石材ハミカゲ石ノミナリ

先ハ聊カ見聞セシヲ略記スルノミ

広島県沼田郡横川町四十二番地

山田伊助方

弾薬大隊砲兵第二縦列第二小隊長

陸軍砲兵二等軍曹

明治廿七年十月五日午後一時卅分認

片柳鯉之助

御岳山各位御中

遙に御嶽大神を拜み奉りて

まつろはぬ外国はらを平けて
かへりまちどの時やまたなむ
親友諸君の御厚意に報ひて
君かためつくせよかしと我友の
いいしことはを□□□ともわれ

こうした見聞記は、戦場からの報告とともに、故郷において兵士を思う肉親、知友にとり、もっともまたれていた便りであっただけに、熱心に読みつがれ、かたりつがれもした。そこに記された兵士の個的体験は、追体験をされることにより、広く共有され、戦争についての統一的なイメージをかたちづくることをうながしもした。⁹⁾ いわば、戦争の実態認識は、このような戦争体験をささえる原体験の構造をあきらかにすることによってはじめて有効なものとなるわけである。そうした認識への一つのところみをなす素材として以下に片柳鯉之助の『遠征日誌』を紹介することとす。

『遠征日誌』

明治廿七年八月三十日戦時召集令下ル。即日郷里ヲ発ス。

三十一日正午十二時第一師団野戦砲兵第一聯隊へ参集ス。即日弾薬大隊第二砲兵縦列ニ編入、牛込弁天町宗参寺ニ舎営ス。

九月一日武器被服受領、第二小隊長心得申付ラル。同日ヨリ廿四日マテ滞在、同月十八日二等軍曹拝命、第二小隊長申付ラル。

廿五日海外出征ノ目的ヲ以テ青山停車場ヨリ乗車、広島ニ向テ出発。

廿六日晴午前五時浜松着、朝食ヲ喫ス。直ニ発車、午後九時神戸着、湊川神社参拝、同社前ニ於テ夕食ヲ喫ス。終テ発車。

廿七日午前五時五拾三分岡山着。朝食ヲ喫ス。六時半発車、福山・尾の道・糸崎等ヲ徑テ午后三時広島市着、同市横川町山田伊助方ニ舎営ス。同日ヨリ十日、十四日迄滞在記事ナシ。

十月十五日晴、五時発途、厳島ニ行ク。千疊閣ニ於テ昼食休憩二時間、午後七時宿舍ニ皈ル。景色絶佳、日本三景ノ一ニ恥チズ。此日、広島西錬兵場

二於テ臨時帝國議會開設。

十六日晴，縦列長秋元大尉
殿ヨリ酒肴ヲ饗セラル。

十七日曇、午後四時二十分
宇品港ヨリ御用船愛国丸ニ
乗組、砲二歩二同船ナリ。

四時五十分酒田丸拔錨ス。
六時諸積載終ル。十時就眠
四時眠醒。九州ヲ左ニ見ル
周防灘ニテ夜全ク明ク。船
中臭氣ニ苦ム。船長サ三百
五十一尺ナリト云フ。

十八日晴北風，北方ニ山陽
道・周防の山脈・海岸ヲメ

遠征日誌

明治七年八月三十日我時呂集令下曰即日御至之數
三上正處士町第一師團駐紮陸兵第一聯隊之營集
即日強弟大隊第三砲兵隊列之編入也此後又町字冬
寺之金堂也

九月一日武冠被服史領第三隊長心得事自九月一日
九月一日武冠被服史領第三隊長心得事自九月一日
甲辰年九月

五。海外出征自的以青山傳車湯君乘車
廣。島。三。向。戶。出。發。

[illegible]

夕食う喫ふ終る食事
 花やふち五時五時三十分岡山省飲食喫ふ言ひ終る
 東・福山鹿の道を新井等へ往く所底三町・廣島市
 有田市・横川所山由伊那方に今所食の日あり十日退席
 至祀事とし

十月十九日、明、存貴達、廣島、行ク、寺野園に於テ、廣島
休憩、之、名、名、所、を、相、會、ニ、遊、ヒ、果、モ、他、佳、日、本、三、里、一、二
和、ク、大、日、廣、島、西、鎗、兵、場、に、於、テ、臨、時、市、小、商、會、開、張、
ナ、ル、以、後、列、也、秋、大、村、殿、一、園、有、テ、遊、樂、ス、ル
ナ、ル、事、也、後、以、二、年、を、片、只、憑、テ、所、用、如、廣、園、也、ニ、
租、稅、三、等、三、同、松、リ、野、草、を、園、田、元、收、錫、六、時、商、積、
報、終、十、時、就、眠、四、時、眠、醒、八、時、左、吏、月、片、所、

夜明け初日、風、雲、若く、初長、三、五、十、二十、三十、
 十八、廿、廿五、廿八、三十、陽、通、月、下、山、崩、海岸、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、
 三、十、廿、廿五、廿八、三十、陽、通、月、下、山、崩、海岸、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、
 暫、時、後、鋪、面、園、人、家、相、當、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、
 狭、ノ、兩岸、山、頂、ノ、破、名、敷、ノ、新、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、
 十九、廿、浪、最、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、
 陽、ノ、底、ノ、見、ル、ノ、浪、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、
 見、ル、十、時、廿、五、廿、八、廿、十、向、ノ、進、行、ノ、故、廿、近、島、嶼、多、ク、或、ハ、絶、無、
 ノ、大、巖、海、中、ノ、峙、立、ス、ル、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、ノ、
 ノ、此、方、ノ、過、
 ノ、時、方、ノ、廿、五、廿、八、廿、十、廿、五、廿、八、廿、十、廿、五、廿、八、廿、十、廿、五、廿、八、
 初、長、月、ノ、与、一、氏、兵、士、上、ノ、大、城、二、此、方、ノ、寄、附、セ、ル、午、辰、と、も

クル。七時三十分右舷ニ馬関ヲ見、左ニ九州門司ヲ見ル。九時馬関港着、暫時投錨。馬関ハ人家稠密ナリ、同港ニ御用船十余アリ、海狭ノ兩岸・山頂ニ砲台数ヶ所アリ。昨夜激浪怒テ船内ニ入ル。

十九日晴、浪最モ荒シ。是即チ玄海灘ナリ。壱岐ヲ過キ、対州ヲ后ニ見タル頃ハ浪少シク和ラゲ、北ニ向テ遙カニ朝鮮島ヲ見ル。十時廿五分西方ニ向テ進行ス。此付近島嶼多ク、或ハ絶壁ノ大巖海中ニ峙立スルアリ。頗ル絶景ナリ。三時三十分巨文島ノ北方ヲ過ク。

廿日晴、六時四十分起床、今朝冷氣一層加ハル。北ニ向テ行進ス。船長古川与一氏、兵以上ニ手拭一筋ヲ寄贈セラル。午后ニ至ル、四方更ニ山ヲ見ズ。北風甚シク怒濤益々強シ。山ノ如キ浪起ル。夜ニ至テ一層甚シ。船内ニ浸入スルコト数回、船員奔走尽力ス。

廿一日晴、北風強六時五十分起床。右方遙カニ二三ノ島アリ。十一時三十五分小青島着、此所ニテ船ヲ止ム。此島ハ人家アリテ開墾中ニ見受タリ。然レトモ樹木少シ、地味粗悪ナラン。土人ハ白衣ヲ着シ漁ヲナスモノト見ヘ、小舟二三アリ。二時十分南方ニ大船四艘ノ並行ヲ見ル。

廿二日晴、北風。七時起床、大同江ニ至ル。此所海水濁リ居レリ。他ノ汽船ト合シ、単艦ノ護衛ニテ大ナル島ノ西方ヲ通過シテ投錨ス。数多ノ島嶼アレトモ名称不明ナリ。米国ノ単艦モ見受タリ。而シテ我第一師団ハ此所ニ集合ノ目的ナランカ、已ニ先着ノ船数十艘アリ。此附近ハ海岸屈曲、島嶼多ク、土人ハ農漁ヲ以テ業トナスモノノ如シ。

廿三日晴、海上穏ナリ。昨日ヨリ喇叭ノ吹奏ヲ止ム。大同江ハ昼夜寒暖ノ差最モ甚シ。今朝露国単艦一隻入来ル。朝ヨリ船艦十三四隻解纜ス。二時人夫一名海中ニ入ル。潮流強クシテ已ニ溺死セントス。倉皇端舟ヲ下ロシ、以テ救フ。午後歩騎兵ノ乗船、単艦ニ続ケ出帆ス。其数三十以上。

廿四日晴、微風海上穏ナリ。此日兵卒以上入浴ヲナス。明日午前出発ノ命令アリ。

廿五日晴、十二時卅分大同江拔錨、十三隻船艦舳舻相御シテ出帆ス。五時二十五分御用汽船一隻舩航スルヲ見ル。

廿六日晴，八時三十分上陸地附近ニ着，軍艦二十八隻警戒シタリ。先着御用船卅余，大同江ヨリ二十時間ニシテ達ス。花園河口ヲ上陸地トナス。八時五十分ヨリ上陸ヲ始ム。端艇ヲ以テ公用行李ヲ第一トシ順次揚陸ヲナス。本船ヨリ上陸地マテ凡二里，上陸極テ困却ナリ。午前十時上陸，土人ハ皆逃走シテ人跡ナシ。依テ牛豚及鶏等ヲ捕ヘ来リ，海水ヲ以テ之ヲ炊キ，以テ喰フ。深更ニ至リ氣ヲ付ケノ声起ル。敵ノ襲撃ナラント大ニ驚ク，少時ニシテ止ム。此夜殆ント眠ル能ハズ。

廿七日晴，夕刻雷鳴降雨，露營ナルカ為メ頗ル困難ス。

廿八日晴，午后曇，北風強シ本日我隊悉皆上陸ス。本日少戦アリタルヤニ聞ケリ。

廿九日晴，北風強シ。設営者八時半出発。

卅日晴，花園口ノ露營地出発，午後六時前肅家堡子ニ着，花園川ノ付近迄ノ広漠タル原野ナリ。偶々人家アルモ至テ少ク，為過半ハ露營セリ。此所ニ進士ノ第ト云家アリ。頗ル富豪ニ見受ケタリ。

卅一日晴，滞在土人ハ大概山上ニ逃ケ居レリ。人家ノ付近ニハ必ス樹木アリ。其他ハ更ニナシ。墓所ハ土ヲ堆積シテ作り，偶々石碑アルヲ見ル。道路ハ甚悪シク，降雨ノ時ハ川トナリ，平日ハ砂原トナリ車輛等ノ通行最困難ナリ。

十一月一日晴，滞在。夜一時，山砲縦列大災起リ大ニ混雜ス。

二日晴，七時半出発前進ス。沿道ノ土人車ヲ押シ，或ハ水ヲ汲ミ以テ我軍ヲ待遇ス。

三日曇，韓家屯ヲ經テ貔子窩ニ舎營ス。此所ハ海岸ニシテ人家百戸以上アリ。佐倉丸ノ火夫泥酔シテ支那人ヲ殺シ憲兵ニ引致セラル。始メテ支那酒ヲ呑ム。度最モ強ク泡盛ノ如シ。少シク臭氣アリ此日行程三里強。

四日晴，北風強シ。午前五時出発，孟家屯及許家店・矯家店・丁家店ヲ經テ夜十二時沙窩店着，露營行程凡六里余。

五日晴，大ニ霜フル。午前六時出発，原野ニ於テ昼食，午後五時黄家店着，豕ヲ徵發シテ食ス。午後八時半出発，六日午前五時大隊長ノ許マテ

着、砲声甚シ、夜中不堪砲声アリ。此日ハ昼夜兼行、一分時モ睡眠スルコト能ハズ、加之道路嶮悪、兵士・人夫ノ疲労名状スベカラズ。

六日晴、朝来砲声甚シ。高城子ニテ昼食、午前九時金州城陥ル、午后七時舍營ス。縦列長ヨリブラシヲ饗セラル。本日十二時大連灣砲台悉ク陥リシト云フ。此夜復州ノ敵兵三四千舍營ノ近傍ニアリト聞ク、頗ル危険ノ場合ナリシ。

七日晴、朝来砲声ヲ聞キタレドモ、午后不聞。午前七時発、十二時某村ニ於テ昼食、休憩二時間ニシテ前進ス。此辺ハ敵ノ戦死者所々ニ散在ス。午后七時金州北門外ニ舍營ス。

八日晴、戦友五六ト金州城ヲ觀覽ス。永安門ヲ入ル、即チ北門ナリ。城廓頗ル堅固ニシテーノ都会ナリ。城壁ハ鍊瓦石ニシテ高サ三間半位、厚二間半、方形ニシテ四方ニ門アリ。門上ニ楼アリ。壁上ニ大砲アリ、且壁上自在ニ砲ヲ運轉スルヲ得。廓内ハ四民ノ家屋ニシテ、其数凡二千、城ノ一方凡千五百米突、海岸ヲ距ル凡一里弱、各所死屍数多アリ。正午舍營ニ皈ル。

九日曇、滞在此辺ハ良好ノ菜多クアリ。生家へ始メテ書状ヲ発ス。

十日滞在晴、人夫牛兎ヲ得テ来ル。屠テ之ヲ食ス。美味也。

十一日曇、暴風。卹兵部ヨリ精(清)酒ヲ寄贈セラル。

十二日曇、滞在。

十三日晴、精米運搬ノ命ヲ受ケ、部下引卒柳樹屯ニ至ル、直ニ荷物受取蘇家屯旅団本部ニ至リ之ヲ渡ス。皈營八時、柳樹屯ハ大連灣ヨリノ上陸点ナリ、金州ヨリ二里半。

十四日晴、支那人井中ニ毒ヲ投スルノ恐アリ、依テ番人ヲ付ス。

十五日晴、卹兵部ヨリ酒及煙草ヲ寄贈ス。

十六日曇、不日旅順攻撃ノ説アリ。

十七日滞在、晴。出発準備。廿一日旅順口攻撃ノ目的決定ノ報ニ接ス。

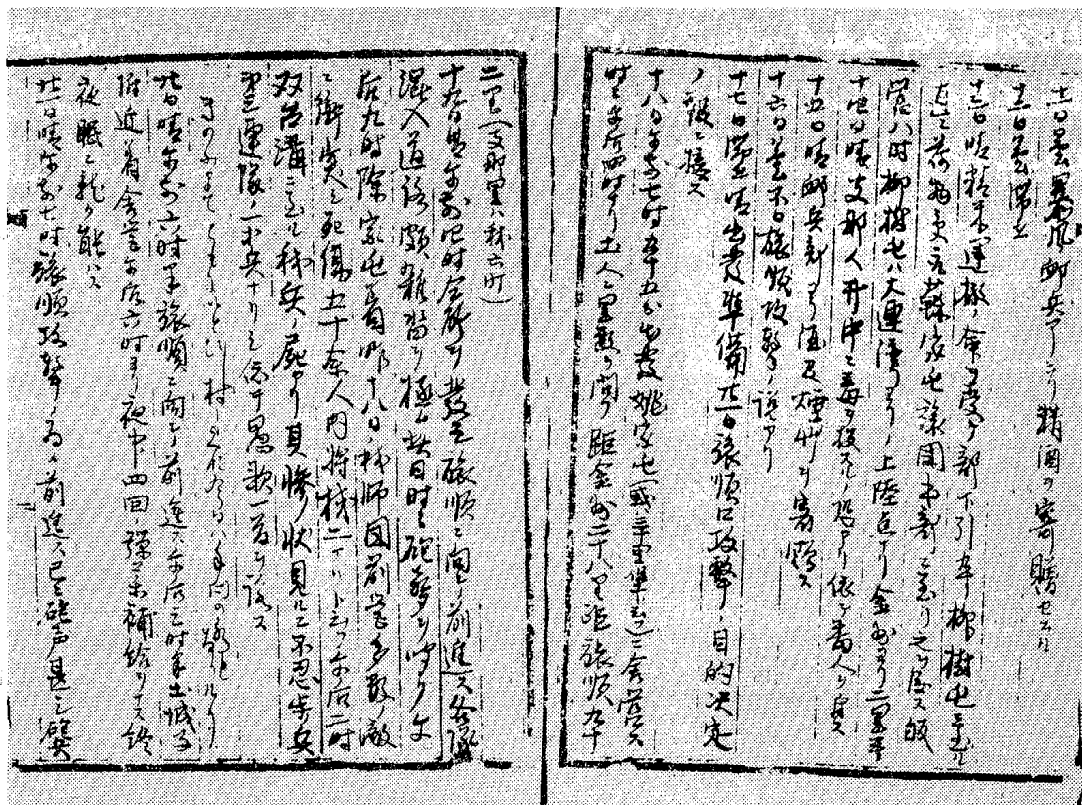
十八日午前七時五十分出発。姚家屯(或ハ三十里堡ト云フ)ニ舍營ス。時ニ午后四時ナリ。土人ニ里数ヲ問フ、距金州二十八里、旅順九十二里(支

那里ハ我六町)

十九日晴，午前四時同所ヲ発シ，旅順ニ向テ前進ス。各隊混入，道路頗雜
沓ヲ極ム。此日時々砲声ヲ聞ク。午后九時除家屯着，昨十八日我師団前營
多数ノ敵ニ衝突シ，死傷五十余人，内将校ニアリト云フ。午后二時双台溝
ニ至ル，我兵ノ屍アリ。其慘状見ルニ不忍。歩兵第三連隊ノ一等兵ナリ
シ。依テ愚歌一首ヲ詠ズ。

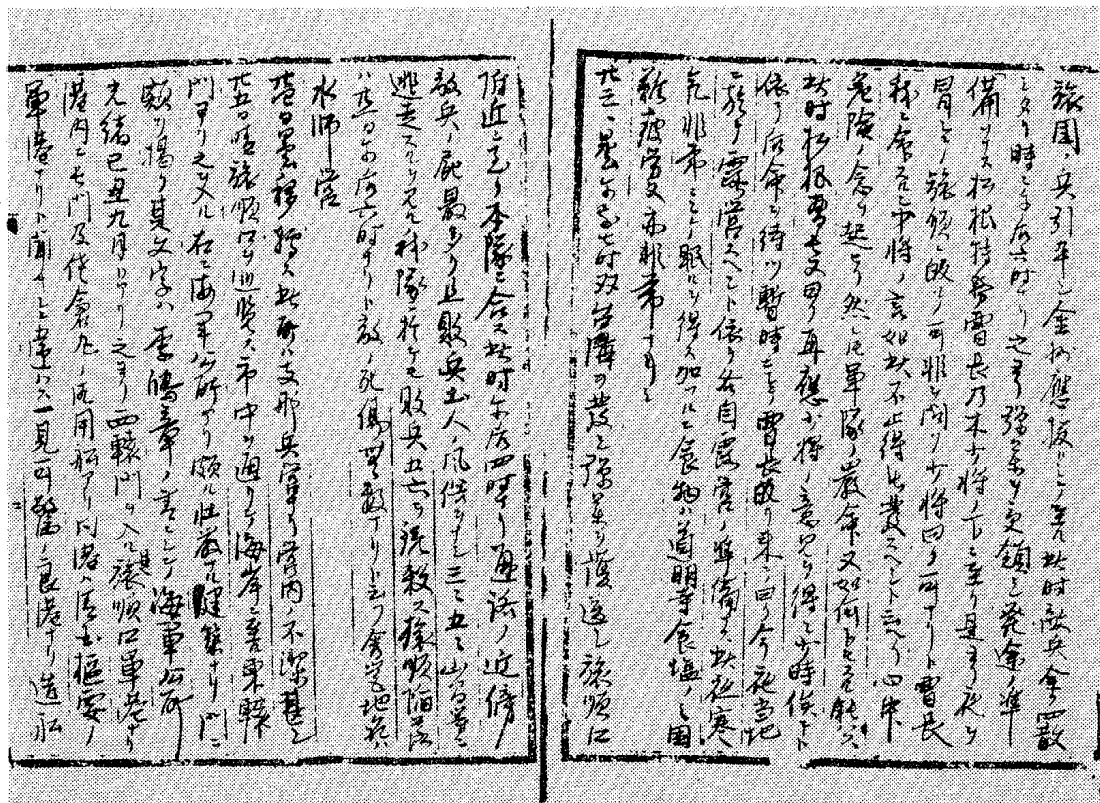
きのふまでともにいとひし村しぐれ

今日は手向の水となりけり



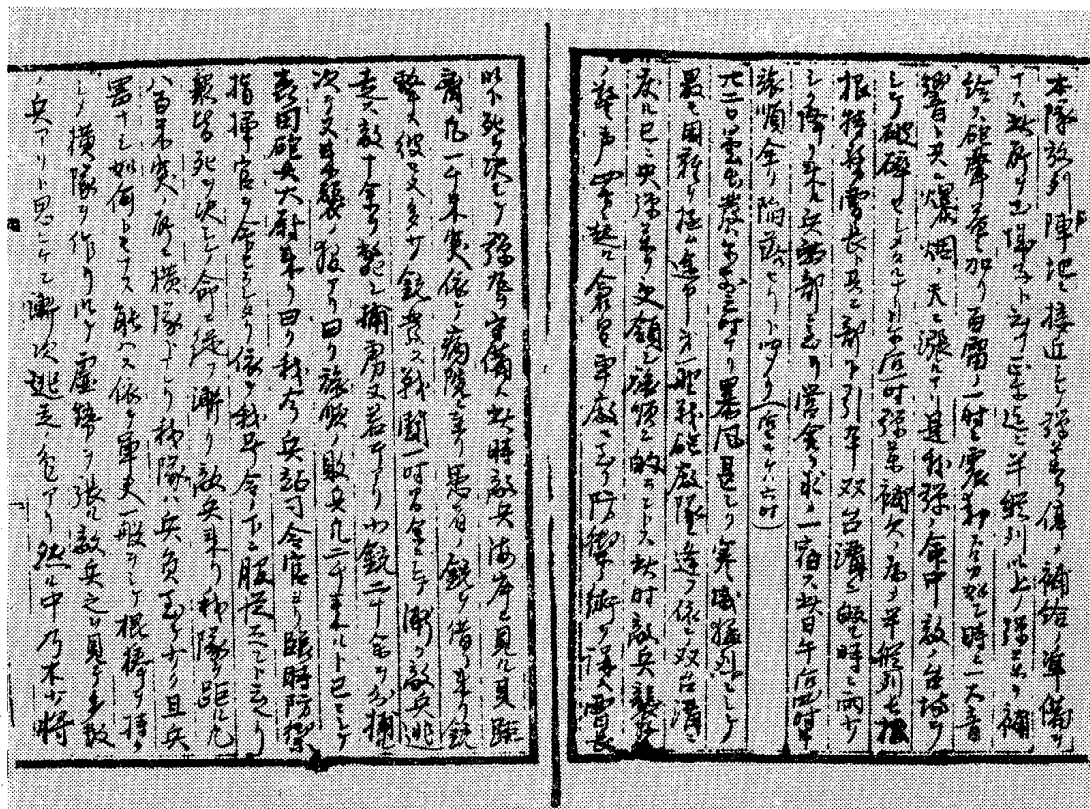
廿日晴，午前六時半旅順ニ向テ前進ス。午后三時半土城子附近着，舍營。
午後六時ヨリ夜中四回ノ彈藥補給ヲナス。終夜眠ニ就ク能ハズ。
廿一日晴，午前七時旅順攻撃ノ為メ前進ス。已ニ砲声甚シ。砲兵本隊放列
陣地ニ接近シテ彈藥ヲ停メ補給ノ準備ヲナス。此所ヲ土城子ト云フ。正午
迄ニ半縦列以上ノ彈藥ヲ補給ス。砲声益々加リ巨雷ノ一時ニ震動スルガ如
シ。時ニ一太音響ト共ニ爆烟ノ天ニ漲ルアリ。是我彈ノ命中，敵ノ台場ヲ

シテ破碎セシメタルナリト。午後一時彈藥補欠ノ為メ半縦列長松根特務曹長ト共ニ部下引卒双台溝ニ皈ル。時ニ雨少シク降り来ル。兵站部ニ至リ營舎ヲ求メ一宿ス。此日午後四時半旅順全ク陥落セリト聞ク（后ニキケバ六時）



廿二日曇。出発ハ午前三時ナリ。暴風甚シク寒威猛烈ニシテ最モ困難ヲ極ム。途中第一野戦砲廠隊ニ逢フ。依テ双台溝ニ戻ル。已ニ兵彈藥ヲ受領シ旅順ニ皈ラントス。此時敵兵襲撃ノ警声四方ニ起ル。倉皇車廠ニ至リ防禦ノ術ヲ講ズ。曹長以下死ヲ決シテ彈丸ヲ守備ス。此時敵兵海岸ニ見ル。其距離凡一千米突、依テ病院ニ至リ患者ノ銃ヲ借り来リ銃撃ス。彼モ又多少銃発ス。戦闘一時間余ニシテ漸ク敵兵逃走ス。敵十余リ斃シ、捕虜又若干アリ。小銃二十余ヲ分捕ル。次デ又来襲ノ報アリ。曰ク「旅順ノ敗兵凡二千来ル」ト。已ニシテ森田砲兵大尉来リ曰ク「我今兵站司令官ヨリ臨時防禦指揮官ヲ命セラレタリ、依テ我号令ノ下ニ服従スベシ」ト云ヘリ。衆皆死ヲ決シテ命ニ従フ。漸ク敵兵来リ我隊ヲ距ル凡八百米突ノ所ニ横隊トナレリ。我隊ハ兵員至テ少ク、且兵器ナシ。如何トモナス能ハズ。依テ軍夫

一般ヲシテ棍棒ヲ持タシメ横隊ヲ作り、以テ虚勢ヲ張ル。敵兵之ヲ見テ多数ノ兵アリト思ヒケン、漸次逃走ノ色アリ。然ル中乃木少将旅団ノ兵引卒シ金州応援トシテ至ル。此時敵兵全ク四散シタリ。時ニ午後六時ナリ。之ヨリ弾薬ヲ受領シ発途ノ準備ヲナス。松根特務曹長、乃木少将ノ下ニ至リ、是ヨリ夜ヲ冒シテ旅順ニ皈ルノ可非ヲ問フ。少将曰ク「可ナリ」ト。曹長我ニ命スルニ「少将ノ言如此、不止得出発スベシ」ト云ヘリ。心中危険ノ念ヲ起セリ。然レトモ軍隊ノ嚴命又如何トモスル能ハズ。此時松根曹長又曰ク「再応少将ノ意見ヲ得ン、少時俟テ」ト。依テ后命ヲ待ツ。暫時ニシテ曹長皈り来テ曰ク「今夜当地ニ於テ露營スベシ」ト。依テ各自露營ノ準備ナス。此夜寒氣非常ニシテ眠ルヲ得ズ。加フルニ食物ハ道明寺食塩ノミ、困難疲労亦非常ナリシ。



廿三日曇、午前七時双台溝ヲ発シ、弾薬ヲ護送シ旅順口附近ニ至リ本隊ニ合ス、此時午後四時ナリ。通路ノ近傍敵兵ノ屍最多ク、且敗兵土人ノ風俗ヲナシ三々五々山間等ニ逃走スルヲ見ル。我隊ニ於テモ敗兵五六ヲ銃殺ス。旅順陥落ハ廿一日午後六時ナリト、敵ノ死傷無数ナリト云フ。舎營地

名ハ水師營。

廿四日曇。移転ス。此所ハ支那兵營ナリ。營内ノ不潔甚シ。

廿五日晴。旅順口ヲ巡覽ス。市中ヲ通りテ海岸ニ至ル。東轅門ヨリ之ヲ入ル。右ニ海軍公所アリ。頗ル壯嚴ナル建築ナリ。門ニ額ヲ掲ク。其文字ハ李鴻章ノ書ニシテ、海軍公所光緒巳丑九月トアリ。之ヨリ西轅門ヲ入ル。是旅順口軍港ナリ。港内ニ長門及佐倉丸ノ御用船アリ。同港ハ清国枢要ノ軍港ナリト聞キシニ違ハズ、一見可驚ノ良港ナリ。造船所アリ、諸機械所アリ、ドックアリ、電燈局アリ、殆ンド我横須賀ノ如シ。戸数凡千以上ニシテ、前ニハ椅子山ノ天險アリ。之ニ備フル所ノ巨砲又最近ノ新式ナリ。台場ハミカゲ石ヲ以テ築キ、実ニ堅固ノ築造ナリ。巨砲ハ二十八珊知米三門、十九珊知米六門ナリ。之ヨリ黄金山ノ砲台ニ赴ク、途中清兵ノ露营地ヲ見ルニ其混雜云フベカラズ。彈藥アリ、或ハ食器、雜穀アリ、或ハ玄米・豆・粟等ヲ炊キ、遺棄スルアリ。粗食云フベカラズ。軍規ノ振ハザル又察スルニ余リアリ。漸ク台場ニ至ル。我彈火藥庫ニ命中シ、為メニ彈藥・砲車等尽ク粉碎シ、悉皆廢物トナレリ。豈愉快ノ至リナラスヤ。此日旅順ノ市街及附近ヲ見ルニ、敵兵ノ死体極メテ多ク、毎戸必ズ三四以上アリ。道路海岸至ル所屍ヲ以テ埋ム。其狀鈍筆ノ能ク及フ所ニアラズ。午後六時舍營ニ皈ル。今ヤ各所ハ悉ク日旗ノ金風ニ翻ルノミ。前代未聞ノ大勝ナラン。此附近ノ山頂ニハ必ズ砲台アリ。其数実ニ二十有余以テ旅順ノ堅固ナルヲ知ルベシ。

廿六日曇、舍内大掃除ヲナス。

廿七日雨。広嶋以來始メテ大雨。此日衛兵司令勤務。本日大雨ナルニモ不掲、人夫悉皆ヲ出シ、旅順口敵兵死屍ノ埋葬ヲナス。午前十時勅語ヲ賜ル。依テ縦列長秋元砲兵大尉捧読ス。左ノ如シ。

勅語

旅順ハ渤海ノ関門敵国ノ頼ミテ鎖鑰ト為ス所今汝等一挙之ヲ拔ク朕深ク其功劳ヲ嘉賞ス漸次天寒ク前途尙ホ遠シ汝等夫益自愛奮勵セヨ

明治廿七年十一月廿四日午后四時三十分

大本營參謀總長

此時一首ノ愚歌ヲ詠ズ。

大君のあまねき恵数ならぬ

我身にまでもかかる嬉しさ

廿八日滞在。昨日大雨の為メ井濁リ呑水ニ苦シム。

廿九日晴。午前十時乗馬演習ヲ兼ネ旅順ヲ再覽ス。東新街ニ至ル。此町ニハ演劇場及遊廓等アリ。家屋ノ構造中々美麗ナリ。海岸ニ沿フテ、中新街ニ至ル。此町ニ有栖川若宮殿下ノ御旅館ヲ見受ケタリ。聞クナラク此港ハ世界三港其一ナリト。

卅日曇。出発準備。

十二月一日曇。午前八時半水師營出発、金州ニ向フ。此日雨少シク降ル。寒氣強シ。正午土城子着、舍營。

二日晴。午前八時三十分出発、三時十分營城子着、舍營。

三日晴。午前八時半出発。午後四時三十里堡着、舍營。沿道ニ敵兵ノ屍多シ。

四日曇。午前七時半出発、正午金州城海寧門即西門外着、舍營。此時縦列長ヨリ来二月頃迄滞在見込ナリト口達アリ。

五日晴。滞在、寒防外套渡ル。

六日晴。徵発物偵察ノ命ヲ受ケ小泉上等兵ト共ニ海岸ニ沿フテ西北ニ進ム。一村落アリ、尚進テ某村ニ至ル。此間敵兵ノ屍最多ク、金州行政庁ニ於テ目下埋葬中ナリシ。中ニハ已ニ墓表ヲ樹テシモノアリ、我軍義ヲ以テスル如斯。之レニ反シ清国土人ハ路傍ニアル戦死者ノ衣服ヲ脱シ之ヲ奪フテ去ル。其暴状惡ミテモ又余リアリト云フベシ。本日生家ヘ書状ヲ発ス。

此日乗馬ヲ以テ一嶮山ヲ越ユ。頗ル危険ノ道路ナリシ。

七日晴。午前九時縦列長清潔検査ヲ行フ。終テ

皇后陛下ヨリ賜ル所ノ御令旨ヲ拝聴ス。其御令旨左ノ如シ。

我第二軍ニ於テ旅順口占領ノ趣皇后陛下聞召サレ頗ル御満悦殊ニ将校下士卒ノ忠勇ナルヲ深ク御感賞ノ旨御沙汰被為在タリ

明治廿七年十一月廿五日

宮内大臣

八日曇。此日薪材徴発ノ命ヲ受ケ午前九時車輛十六台ヲ卒ヒ某村海岸ニ至リ漁舟五六ヲ破リ来ル。此辺ハ清兵ノ墓多シ。命ニヨリ分捕銃四挺ヲ納ム。

九日晴，当直。

十日曇。暴風寒氣強シ。人夫長木村某生鱈ヲ贈ル。炊キテ「ブラン」ノ下物トナス。生鱈ヲ口ニスル今回ヲ以テ始メナリ。

十一日朝来強風寒氣強シ，三寸余ノ氷ヲ見ル。

十二日曇。薪徴発ノ命ヲ受ケ午前八時出發，至ル所樹木少シ，為ニ徴発困難ナリ。午后二時飯營，海岸一円ニ氷リ詰メタリ。

十三日曇。北風甚シク寒氣非常ニ強シ。実父ヨリ書状来ル。

十四日晴。寒氣一日毎ニ増ル。大隊衛兵司令勤務。

十五日晴，寒暖計十五度ナリト云フ。髯ニ附着スル呼吸氣忽チ結氷ス。海上ヲ見レバ汐結氷シテ白雪ノ如シ。卹兵部ヨリ酒及烟草ヲ寄送(贈)ス。

十六日朝来少雪，九時止ム，北風強シ。

十七日晴，渤海ヲ見ルニ氷益甚シ，第一軍ニ於テ二回ノ勝戦アリタル趣。作戦命令アリ。

十八日快晴，午前ハ微風ダモナク稀ナル好天氣ナリ。午后一時薪徴発ニ赴ク。某仏閣ヲ搜テ以テ材ヲ得。渤海ヲ見レバ海岸ヨリ一里以上結氷シテ人馬共氷上ヲ歩ムヲ得ベシ。以テ寒氣甚シキヲ推知スルニ足ル。

十九日晴，風ナク天氣穩ナリ。

廿日晴，本部ヨリ勝飯ト称スル乾飯様ノモノヲ渡サル。

廿一日快晴，此日忠勇義烈ナル同胞戦死者ノ靈ヲ金州城東門外ニ祭ル。午前十時縦列長秋元砲兵大尉ノ引卒ヲ以テ式場ニ至ル。時ニ午前十一時ナリ。逐次参拝，捧刀ノ最敬礼ヲ行フ。微風ダモナク天氣晴朗ナリ。式場ニハ国旗及五色ノ旗ヲ樹テ，玉串供物ヲ備ヘ四方ニ注連縄及五色ノ幕ヲ張り，白衣ヲ着スル祭官モ見受ケタリ。音楽ハ洋々トシテ玉ノ鎮（喇叭ノ譜）ヲ奏シ，各隊ノ銃剣ハ日光ニ輝キ，上将官ヨリ下人夫ニ至ルマデ拝礼

ノ為メ参集スル者殆ント二万、最モ嚴肅ナル盛典ナリ。以テ聊カ靈魂ヲ慰ムルニ足ラン。拝覧ノ為メ清人モ又集合スル者多シ。正午飯營ス。午后金州城内ヲ散歩ス。偶々儒者李中蘇ナル者アルヲ聞ク。依テ是ヲ訪問ス。揮毫中ナリシ。二三葉揮毫ヲ頼ミテ飯ル。中々能筆ナリ。年齢七十位ニテアリシ。

廿二日晴、稍暖氣ナリ。片柳福太郎君ヨリ書状来ル。

廿三日晴、午前八時糧餉(餉)部荷物運搬ノ為メ車輛三十台ヲ引卒シ、北部三十里堡ニ至リ午后七時飯營ス。

廿四日晴、午前十一時第三師団応援トシテ第一師団ハ来廿六日出発ノ命下ル。

廿五日晴、此頃降霜頗ル多シ。

廿六日曇、暖氣ナリ。昨夜少シ雪フル。十二時降雨、午后強風、午后七時天皇陛下ヨリ恩賜清酒分配ノ命アリ。

廿七日朝来降雪。此日大連灣ニ至リ荷物運搬ノ指揮ヲナス。馬上寒氣ニ苦ム。

廿八日晴、寒氣甚シ。

廿九日晴、午后一時 天皇陛下恩賜ノ酒ヲ以テ兵卒以上一般宴会ヲ開ク。一同鯨飲勸(飲)ヲ尽シ、陛下万歳、陸軍万歳ヲ三唱シ解散ス。時ニ午后七時ナリ。宴中余興トシテ落語講談等アリ。午后八時一等軍曹ニ被任第三小隊申付ラル。

卅日晴、第三小隊ニ移ル。

卅一日晴、門松及国旗等ヲ整へ迎年ノ準備ヲナス。

明治廿八年一月元旦、此日天氣晴朗ニシテ微風ナク初日殊ニ長閑ナリ。午前八時拝賀式ヲ行フ。占領地各舎營ハ毎戸国旗ヲ掲ケ、門松ヲ立テ、或ハ注連縄ヲ張り、其光景宛然日本ト異ル所ナク、自ラ千里ノ異域ニアルノ念ヲ斷タシメタリ。新年作一首。

あら玉の年もろともに 唐土の国もけふよりあらたまるらん

二日晴、午前九時同僚二三ト大連灣マテ遠察頗ル愉快ナリシ。午后六時飯

營。

三日晴，本日ヨリ城内ニ於テ正午ノ号砲ヲ発ス。且城内ニ師団兵一般ノ為メ浴場ヲ新設ス。

四日晴，衛兵司令ヲナス。郷里ヘ書状ヲ出ス。

五日晴，朝来北風寒氣強シ。服部玉三君ヨリ書状来ル。

六日晴，柳樹屯ヘ荷物運搬ノ為メ出向ス。岸野及高名ヨリ書状到来。郷里ノ無異ヲ知ル。

七日晴，人夫村田某飯朝ニ付キ故山ヘ書状ヲ発ス。

八日曇，柳樹屯ニ至リ荷物運搬ノ指揮ヲナス。三時半飯營。

九日晴，朝来北風寒氣益強シ。柳樹屯ニ至ル，六時。実父ヨリ書状来ル。

十日曇，寒氣強シ，氷点以下ナリ。

十一日晴，柳樹屯ニ至ル，荷物運搬指揮ヲナス。片柳辰雄君ヨリ書状来ル。

十二日晴，本日蓋平ナル第一旅団ヘ弾薬ヲ補給ス。衛兵司令勤務。

十三日晴，

十四日曇，柳樹屯ニ至ル。

十五日朝来降雪，寒氣甚シ。

十六日曇，大連灣ニ行ク。暴風甚シ。第二師団即チ仙台兵大連灣ニ来リ碇泊，将校ノミ上陸シテ金州ヲ見ル。聞ク所ニヨレバ威海衛方面ヘ上陸ナスト云フ。

十七日晴，当直。星野上等兵依病飯朝。依テ書状ヲ託ス。

十八日晴，本日山砲縦列出発。方向ハ威海衛ナラン。近来軍用人力車到来。柳樹屯及金州地方ニ於テ使用ス。

十九日晴，柳樹屯ニ行ク，午后八時。片柳益徳君及実父ヨリ書状到来ス。

廿日曇，金州ニテ蕎麦粉及小麦粉ヲ求メ鋤ノ柄其他種々ノ器具ヲ以テそばヲ製シ，ゑび寿講祝ナス。頗ル愉快且美味ナリシ。酒ハ日本製，肴ハ鯛ノ味噌漬ナリ。戦中ニハ稀ナル御馳走ト云フベシ。

廿一日，車輛受領ノ為メ柳樹屯ニ行ク。

廿二日晴，衛兵司令勤務。

廿三日晴，第二師団威海衛附近へ無事上陸セリト云フ。

廿四日朝来降雪，少時ニシテ止ム。当直。

廿五日晴，羊皮ヲ寒防ノ為メ給セラル。大サ置位。

廿六日曇，高橋少尉人夫及車輛補給ノ為メ蓋平ヘ向テ出発ス。人夫舩朝ニ付書状ヲ託ス。

廿七日晴，柳樹屯行。北風強ク海上甚タ困ム。須崎薦吉君ヨリ書状来ル。

廿八日晴，強風寒氣日一日ニ加ハル。

廿九日晴，寒氣猛烈，今朝寒暖計摂氏零以下二十度ナリ。夜今村軍曹宴ヲ開ク。生招カレテ行ク。

卅日曇，郵兵部ヨリ寄贈ノ酒ヲ以テ孝明天皇祭ヲナス。

卅一日暴風降雪寒威凜烈。衛兵司令ヲナス。哨兵ノ辛苦思ヒヤラレテ氣ノ毒ナリ。当日ハ上陸以來始メテ見ル所ノ天候ニシテ戸外ニ出ツレバ忽チ吹雪面部ニ結氷シ，手足ハ忽チ凍痛ヲ覺ヘ，其困難云フヘカラズ。柳樹屯ニ至リシ人夫等凍傷ニ罹リシ者過半ニ及ブ。

二月一日晴，北風強ク寒氣一層増ル。

二日晴，書状ヲ認ム。実父及金井・馬場道風等ノ諸氏ヨリ書状来ル。故山ノ様子ヲ詳ニセリ。

三日晴，寒氣稍減ズ。

四日曇，

五日晴，寒氣少シク減ズ。去ル三日威海衛占領ノ捷報ニ接ス。且軍艦ヲ分捕セシトノ説アリ。

六日晴，稍暖氣ヲ覺フ。

七日曇，柳樹屯ヨリ彈藥運搬ノ為メ出張。但シ蓋平ヘ補給スルモノナリ。本日新聞ヲ見ルニ有栖川大將宮殿下薨去アリシヲ確知ス。痛悼ノ至リナリ。又小松宮大將宮殿下參謀総長ニ任ゼラレシヲ知レリ。

八日曇，富藤軍曹以下七名蓋平ニ行ク。父及野村孝三君秋山嘉久君ヨリ書状到着ス。

九日曇，兩三日余程暖氣ナリ。衛兵司令勤務。

十日快晴，步兵第貳連隊蓋平ニ向テ出發。昨夜十五連隊予備徵員衛兵所内ニ舍營ス。

十一日晴，柳樹屯ヨリ彈藥受領ス。岸野氏及青梅兩広瀬氏ヨリ書翰到来。

十二日晴，稍暖氣ナリ。出發準備多忙ヲ極ム。

十三日曇，飯朝者ハ託シ郷里ヘ書状ヲ發ス。

十四日，蓋平ニ向テ出發ス。時ニ午前十時ナリ。曇天雪模様ナリ。午后六時北部ノ三十里堡着，舍營。頗ル雜沓セリ。編成ハ一小隊ノ車三十台故ニ一縦列ノ長キコト殆ンド一里余。雨少シク降ル。

十五日，昨夜ヨリ降雪加フルニ暴風寒氣一時ニ増ル。午前七時出發，午后八時長林堡着，舍營。本日ノ行軍ハ非常ノ困難ニシテ，狀況筆紙ニ尽シ難シ。其一二ヲ摘記スレバ北風ニ向テ前進，面部雪ノ為メニ覆ハレ耳目口鼻結氷スル事，又ハ暴風ナルガ為メ，雪道路ヲ埋メ，為メニ道ノ明ラサル等之ナリ。人夫車輛ノ損傷不少。

十六日晴，午前八時出發。普蘭店ヲ徑テ午后九時山東堡着，舍營。

十七日朝来降雨。掌家屯ヲ經テ半家屯着。此日午后六時北風俄ニ起リ颯々トシテ肌ヲ冒シ寒氣凜烈，其困難例之フルニモノナシ。一昨十五日ニ増ル一層ノ困難ヲ極ム。車輛ハ凍凝シテ忽チ挫ケ，人夫ハ凍傷ヲ起シテ路傍ニ斃ル。未タ曾テ加此困難ニ罹リシコトナシ。舍營ニ就キシハ夜十二時ナリ。之ヨリ空鐘ニ糲ヲ入レ粥トナシ以テ空腹ヲ僅カニ補ノミ。此夜縦列長彈藥ニ番兵ヲ附セズ。其凍死スルヲ患フルナラン。戦時ニ当テ彈藥ニ守兵ヲ付セサル又稀有ノ事ナラスヤ。

十八日晴，午前七時半出發。午后一時復州城ニ至ル。同城ノ構造ハ金州ニ髣髴タリ。只異ル所ハ稍小ニシテ市街少シク清潔ナリ。午后七時無名地着，舍營ス。

十九日曇。午前七時出發。揚家屯ヲ徑テ午后六時半利家村着。水最モ乏シ。炊事ニ困却ス。不止得各々自炊ス。米ヲ磨クコト能ハズ。其儘炊キテ食ス。是又軍中ノ常ナラン。

廿日晴，午前八時出發。朝来北風甚シク寒氣非常ナリ。槐書房ヲ徑テ午后八時二台子着，舍營。土人ニ里程ヲ問フ，熊岳城ヘ十五里，蓋平ヘ七十五里ナリト云フ（但支那里）。

廿一日晴，午前八時半出發，寒氣益々強シ。芦家屯着，舍營。時ニ午后六時ナリ。此日正午熊岳城ヲ通過ス。結構又金州ニ似タリ。城壁崩壊セシ所多シ。南北ニ樓門アリ。

廿二日曇。午前八時半出發。正午ヨリ降雪然レトモ稍暖氣ナリ。午后四時蓋平附近上家塞着，舍營。

廿三日朝来降雪，当分滞在予定ナリシガ午后一時俄然出發ノ命令アリ。曰ク昨夜砲数門ヲ有スル敵ノ一隊太平山ヲ占領ス。依テ我師団ハ是ニ向テ前進ス云々。依テ倉皇準備ヲナス。車輛不足ナル為メ支那車ヲ雇ヒ，直ニ前進シテ蓋平城東門外ニ至ル。時ニ夜九時過ナリ。縦列長秘ニ命令ヲ受領セヨト，依テ闇夜ヲ冒シテ行ク。道路不明大ニ困難ス。漸ク本部ヲ尋ネ僅カニ命令ヲ得テ皈ル。時ニ夜十二時ナリ。

廿四日曇，出發ノ命ヲ待ツ。昨夜第一軍縦列ハ前進ス。午前十時支那車借受ノ命ヲ受ケ二台子兵站司令部ニ至ル。二十輛ヲ借受ケテ来ル。然ルニ我軍縦列ハ既ニ前進ス。依テ大ニ所置ニ苦ム。相談センカ我一人ノミ，前進センカ本隊ノ在ル所ヲ知ラズ。茲ニ於テ意ヲ決シ再ヒ二台子ニ皈リ車返却ノ事ヲ具申ス。司令官曰ク「先ニ十五台ヲ貸与セリ。此二十台ハ該十五台ト交換セシメンカ為ナリ。若交換セサレハ糧秣運搬ノ計画皆変換セサルヲ得ス。今日夜ヲ徹スルモ可ナリ。汝行テ該車ヲ返却スヘシ」ト。此時已ニ午后四時半ナリ。不得止二十ノ支那車（馭者皆清人）ヲ卒ヒテ北進ス。此日太平山ハ激戦ナルカ為メ砲声天地ヲ動カス。故ニ馭者進ム事ヲ好マズ，大ニ困却ス。漸ク蓋平ニ至ル，已ニ夜ニ入レリ，雪明リヲ以テ前進ス。乗馬疲労シ進マズ。依テ車ニ乗り馬ヲ車ノ后方ニ繋テ以テ益々前進ヲ急ク。時ニ前方ニ当テ燈火ヲ認ム。漸ク至レバ果シテ軍隊ノ舍營ナリ。我隊ノ所在ヲ問フ不明。此所ヲ青嶺甫ト云フ。時ニ十一時余ナリ，又前進シテ所在ヲ尋ヌレトモ不明。支那人ハ就宿ヲ促シテ止マス。寒氣ハ増々加リ進退茲

ニ谷マル。再ヒ青嶺甫ニ販リ輜重大隊ヲ尋ネ所在ヲ問フ。少シク手掛リヲ得タリ。漸ク本隊ヲ得、時ニ廿五日午前四時三十分ナリ。茲ニ於テ蘇生ノ思ヲナセリ。此所ヲ里茂林溝ト云フ。本日ノ戦ハ午前六時ヨリ午后四時渡ル激戦ナリ。人夫等凍傷ニ罹ル者多シ。

廿五日晴、午前九時前進ス。途中命アリ蓋平ニ販ル。昨日ハ長時間戦鬪遂ニ太平山ヲ占領ス。然レトモ敵兵達ハ退カスト云フ。午后二時紅旗園子着、舍營。

廿六日晴、暴風 滞在。蓋平ハ頗ル美ナル市街ニシテ、大サ金州ヨリ稍小ナルモ構造ハ中々嚴重ナリ。市ノ中央ニ樓門アリ、廓内金州ヨリ清潔ニシテ商家ノ構造壯麗ナリ。

廿七日晴、車輛修理ヲナス。午后三時支那車返納ノ命ヲ帶ヒ二台子兵站部ニ至ル、司令官ノ命ニヨリ同所ニ一宿ス。

廿八日曇、午前八時半二台子出發、途中蓋平東門外方一輜重監視隊ニ立寄り、金子及車輛ヲ渡シ、午前十一時半本隊ニ販ル。郷里ヘ書狀ヲ發ス。

三月一日朝來降雪。第一軍縦列弾藥受領、敵ハ前進ノ模様アリ。明日午前九時李茂林溝ニ移転ノ命アリ。

二日曇、第一軍縦列ハ命令通り移転ス。

三日快晴、旦少シク暖氣ナリ、稍春色ヲ呈セリ。本日我軍縦列第一軍縦列ニ合ス。二月三日ノ新聞生家ヨリ來ル。

四日晴、午前八時半李茂林溝ニ向テ出發ス。我御嶽神社々務所ヨリ縦列一同ヘ神符ヲ送附セラル。同時ニ片柳福太郎、須崎是保、黒田忠太郎・高名愛太郎ノ諸友ヨリ書狀來ル。

五日快晴、午前八時半弾藥受領ノ為ニ蓋平ニ至ル。途中和田忠太郎氏ニ面会ス。去ル三日第一軍ニ於テ牛莊占領セシト云フ。

六日晴、午前六時半出發北進ス。午后四時摂家堡子着、舍營。此間三家子及坡台子等ノ村落アリ。一兩日晴氣ナルカ為メ積雪融解ノ道路泥濘ニシテ行軍頗ル困難實ニ名狀スル能ハズ。旦雪水ハ道路低キカ為メ宛然川ノ如シ。午后二時砲声ヲ聞ク、營口方面ナリ。

七日曇，午前七時前唐家凹子ニ向テ出発，途中雨雪天トナリ太ダ困難ヲ極ム。正午舎營。

八日晴，寒氣増ル。当日ハ我氏神ノ大祭日ニ付キ早朝庭前ニ出テ遙拝セントス。面ヲ洗フノ水ナシ，不止得雪ヲ以テ面及手ヲ洗ヒ東方ニ向テ遙拝ス。午前八時營口方向ニ当テ砲声甚シ，蓋平以北即チ營口附近ハ頗ル平亘ニシテ眼界ノ達セサル広原ナリ。太平山ハ北原野ノ中央ニアル孤山ナリ，山高カラス。此ニ陣地ニハ適當ノ場所ナラン為メニ我軍ノ苦戦思フヘキナリ。滯在此所即チ前唐家凹子ナリ。

九日晴，午前六時川心店ニ向テ前進ス。師団ハ昨夜緊急集合ヲナシ前進シタリト云フ。当日ノ戦場ヲ田庄台ト云フ。攻撃ハ午前八時頃始メ午后四時終ル。我軍ハ第一第二ノ兩軍連絡攻撃ナルカ為メ彼我兵大砲数十門ツツヲ有ス。故ニ砲声ノ盛ナルコト百雷ノ一時ニ鳴動スルカ如シ。午后三時頃ニ至リ同所ハ兵燹ニ罹リ火藥庫ノ破列(裂)スルアリ。烟ハ天ニ漲リ其状能ク鈍筆ノ及フ所ニアラス。結果未明。午后十時半再ヒ前唐家凹子ニ歸リ舎營。

十日晴，此所ハ營口付近ニシテ頗ル野鄙ナリ。營口ハ一大都会ニシテ各国人多ク居留スルト云フ。前ニハ一大川アリ。即チ遼河ナリ。目今結氷セリ。午后三時老爺届着舎營。聞ク所ニヨレハ昨日ハ大勝利ナリト云フ。

十一日曇，午前八時出発，博落舖(博拉堡)着，時ニ午后七時。道路泥濘，行軍困難ヲ極ム。

十二日曇，午前七時三十分出発，蓋平方面ニ向ケ前進ス，北風強ク寒氣加ハル。午后五時蓋平以南六里村着舎營。

十三日曇，朝来北風寒氣強シ，滯在。本日ハ清曆光緒二十一年二月十八日ニ当ル。

十四日降雪且北風強ク寒氣非常ナリ。我軍縦列彈藥補給ノ為メ蓋平南門外ニ至ル。午后二時彈藥ヲ渡シ四時帰營。実父ヨリ書状来ル。田庄台ノ攻撃ハ三方ニシテ敵兵血路ヲ失ヒ頗ル快戦ナリシト云フ。

十五日晴，北風益々強ク寒氣漸ク増ス。郷里ヘ書状ヲ出ス。

十六日晴，稍春色ヲ呈セリ。

十七日晴，滞在，道路ニ雪水流レ出テ川ノ如シ。

十八日晴，移転ノ準備ヲナス。然ルニ向凡一週間滞在ノ命アリ。

十九日晴，大ニ春メキタリ。午后八時人夫三十一名編入。

廿日晴，弾藥受領ノ為メ午前七時出発，蓋平ニ至ル。

廿一日曇，南風暖氣大ニ益ル。夜間ト雖トモ氷ラス，道路最モ悪シ。昨日石丸三等看護長一等昇進ス。

廿三日曇，東風，道路大ニ乾燥ス。

廿四日曇，午前八時出発，蓋平東門外ニ於テ鎮魂祭ヲ行フ。式場ハ高丘ニシテ四方ニ注連縄ヲ張り，前面ニ国旗ヲ交叉シ，五色ノ旗ヲ樹ツ。距離トシテ詳細ヲ知ル能ハサルモ金州ノ時トハ大同小異ナリ。各兵順序ニ従ヒ最敬礼ヲ行フ。就中歩兵棒銃ノ如キハ恰モ秋野ノ薄ノ如ク，樂隊ハ肅トシテ国ノ鎮メヲ奏シ最モ嚴然タル祭典ナリ。天又忠勇ノ士ヲ惜ムカ少シク雨ヲ下ス。午后一時帰營，直ニ葉家溝ニ移ル。

さなきだに涙に袖はぬれつるを又もや雨のふらんとすらん

廿五日曇，酒及巻烟草ヲ卹兵部ヨリ寄贈セラル。

廿六日，朝来小雨，衛生委員申付ラル。

廿七日曇，去ル廿五日ヨリ井戸ニ番人ヲ付ス，支那人投毒ノ恐レアレハナリ。岸野・松本ノ両氏ヨリ書状来ル。

廿八日晴，当時蓋平ハ清潔ニ専ラ注意ス。掃除トシテ毎日人夫ヲ出ス。

廿九日晴，近来ハ天氣清如春色益々加ル。当師団第一軍ニ編入ス。

卅日晴，毛皮ヲ納ム。午前十時乗馬ヲ以テ某山々腹ナル仏閣ニ至ル。構造大ナラサルモ，中々美ナリ。觀音菩薩ヲ安置ス。眺望佳ナリ。左ハ渤海，右ハ山岳起伏シ，正面ニ蓋平城アリ。且村落各所ニ散在ス。是皆一眸ノ中ニアリ。山僧四人居住シ，待遇最モ丁寧ナリ。名刺及巻烟草ヲ与フ。大ニ喜色アリ。直ニ舍營ニ皈ル。午后零時半ヨリ乗馬演習ヲナス。高橋少尉之カ引卒タリ。五六ノ村落ヲ經，或ハ山ヲ越ヘ，或ハ川ヲ渡ル。天候最モヨク，頗ル愉快ナリ。皈營午后四時。

卅一日晴，強風。范振東即チ營舎ノ主人，親戚ヨリ到来セントテ生海老ヲ贈ル，依テ錢若干ヲ与フ。不受，不得止鴨ヲ与フ。以テ返礼トナス。彼大ニ喜フ。

四月一日快晴。頗ル長閑ナリ。郷里書状ヲ発ス。午后一時乗馬ヲ以テ蓋平ニ遠足ス。近来同所ハ衛生上大ニ注意スル所アリ，城内頗ル清潔トナレリ。

二日晴，午前九時縦列長清潔検査ヲ行フ。

三日，近来媾和使李鴻章負傷ノ説囂シ。

四日晴，午前八時三十分乗馬演習。

五日曇，東風暖氣日一日ニ加ハリ，柳樹黄色ヲ呈ス。

六日晴，少シク寒シ。午后一時乗馬演習，午前高橋少尉巡回，談偶々媾和ノ事ニ及フ，已ニ和成シ如ク云ヘリ。

七日曇，朝鮮大君主陛下ヨリ左ノ勅語ヲ賜フ

勅　　語

大日本帝国　皇帝陛下ノ征清陸海軍各隊ニ告ク

朕惟ニ嚮キニ大日本帝国　皇帝陛下カ朕カ王国ノ独立ト東洋大局ノ平和ヲ維持スルカ為メ清国ニ向テ宣戦ヲ布告ス　大日本帝国　皇帝陛下陸海軍ハ陸ニ海ニ大捷ノ膚功ヲ連奏ス是固ヨリ　大日本帝国　皇帝陛下ノ感徳ニ因ルト雖モ抑又卿等　大日本帝国　皇帝陛下ノ陸海軍將校下士卒ノ忠勇義烈ニ出ツ朕茲ニ特ニ朕カ信任スル軍務大臣趙義淵ヲ派シ朕及朕カ臣民ノ誠功ナル慰問ト謝意ヲ卿等

大日本帝国　皇帝陛下ノ陸海軍將校下士卒ニ宜致セシム

大朝鮮開国五百四年二月十四日

大君主御揮　御璽

勅奉　官内大臣李載冕

八日晴，目今金州地方ニ於テ荒(虎)列刺病発生シタリト云フ。八時三十分乗馬演習，第二歩兵縦列ニ至リ中休ス。本部ニ至ル。家屋宏大且美ヲ極ム。如此ハ未曾テ目撃セシ事ナシ。聞ク所ニヨレハ此家主人ハ我旗本位ノ

格式アリト云フ。

九日晴，午前十一時馬匹ノ検査アリ。

十日晴，強風午前八時蓋平河口ニ向テ終日行軍，二時三十五分帰營。

十一日晴，金州ニ向テ出発ノ命令アリ。三月廿七日ノ新聞ヲ見ルニ李爺ノ負傷ノ記事アリ。皇后陛下ヨリ真綿ノ恩賜アリ。

十二日曇，七時三十分出発 金州ニ向フ。寒氣加ハリ旦降雨トナレリ，午后三時陀(坨)台堡附近前安平着舎營。

十三日快晴，午前七時出発。昨夜降雨ノ為メ道路泥濘旦砂原多クシテ行軍困難ナリ。午后六時半熊岳城ヲ經テ號房ニ着，舎營。

十四日，午前六時出発，晴，槐書房西陽台等ヲ經テ午后六時半，高家店着，舎營。当日ハ長時間ノ行軍故人夫等空腹ヲ来シ道路ニ倒ル者多シ。

拾五日晴，午前六時出発，石灣嘴，揚家屯，燕家屯等ノ諸村落ヲ經テ午后三時馬廠屯着，舎營ス。

十六日，午前六時出発。三家子，八里庄ヲ經テ復州城ニ至リ，暫時休憩ヲナシ，午后三時范家屯附近舎營。此所ヲ馬関子ト云フ。舎營頗ル荒，屋敷物ナク，戸障子ナク，只僅ニ雨露ヲ凌クニ足ルノミ。當時ハ道路ヨロシク，行軍容易ナリ。船田軍曹金州ヨリ販ル，依テ媾和説ヲ聞ク。略ホ成リシ如ク云ヘリ。然レトモ之又一種ノ巷説ニ止マルノミ。近来ハ空中ニ雲雀轉リ，或ハ燕ノ舞フアリ。柳ハ青色トナリ，野辺ハ若艸ノ萌ユルアリ。桃花ハ今ヤ蕾ヲ破ラントス。乗馬ノ行軍好時季トナレリ。

十七日晴，午前六時出発，孫家屯，李家溝及大付家屯，小付家屯，李家店，大賈家屯等ヲ徑テ午后二時普家溝ニ至リ舎營。

十八日晴，頗暖氣，午前六時出発。普蘭店，表甸堡及石河駅等ノ諸村ヲ徑テ午后三時山嘴ニ着，舎營。此所ヨリ金州マテ清里五十里ナリト云フ。石河駅ハ一小城ナリシモ今ハ外廓尽ク崩壊シ，僅ニ其形跡ヲ存スルノミ。

十九日晴，金州地方流行病アリ，為メニ外出ヲ禁セラル。師団ハ金州ニ移転ノ予定ナリシモ復州ニ止ル。

廿一日晴，朝来南風甚シ，午前八時出発，北平里堡及石河駅ヲ經テ午后三

時半五里台子着，舍營。風益強ク，土砂ヲ飛シ一時ハ咫尺モ分ラサル程ナリ。為メニ行軍頗ル困難ナリ。途中近衛隊ヲ見ル。

廿二日晴，又暴風。午前六時出發，正午某村着，舍營。扣当屯，長林堡及普蘭店等ヲ通過シタリ。

廿三日，晴，寒氣強ク，水結氷セリ。午前六時半出發，牛圈子，鄧家屯ヲ經テ正午揚家屯着，舍營。当分滞在ノ予定ナリ。舍營主人書ヲ能クス，名ヲ牛雲峯ト云，号ヲ乙泉ト云フ。

廿四日晴，滞在。当地ハ目下梅花漸ク咲クナリ，以テ清國ノ寒氣ヲ推知スルニ足ル。

廿五日晴，生家へ書面ヲ発ス。新調ノ衣服及水筒渡ル。

廿六日晴，村田寅之助，片柳福太郎ノ両氏及実父ヨリ書状来ル。午后乗馬演習。

廿七日，午前九時ヨリ降雨，雷鳴。十時縦列長清潔検査ヲ行フ。実父ヨリ書状来ル。氷川神社神官須崎弥三郎氏ヨリ送附セラル。

廿八日曇，朝来強風，筒鳥ノ声ヲ聞ク。

廿九日，昨夜ヨリ強風且降雨，午后暴風トナリ窓ヲ破リ雨舎内ニ浸ス。

卅日曇，午前十時一馬曳二輪車受領ノ為メ高橋少尉引卒ヲ以テ炮台子ニ至ル。都合ニヨリ受領明日トナレリ。午后二時二十分同地ニ舍營ス。

五月一日晴，車輛七十二台，輓馬八十九頭ヲ受領ス。且輪卒五十五人入隊，頗ル繁雜ヲ極メタリ，媾和締結シタルノ説アリ。

二日晴，舍營清潔ヲ厳行ス。午后二時北村一等軍医巡視，虎列刺各地ニ発セシト云ヘリ。午后六時宮家房ニ至リ北村軍医ヨリ衛生ニ関スル命令ヲ受領ス。本日転山頭ニ避病院ヲ設置ス。同院ニ於テ死亡一名，八名ノ新患ナリ。悪疫漫延ヲ防ク為，交通遮断。

三日晴，引続キ清潔法ヲ行フ。当隊一名下痢ヲ発シタル者アリシモ幸ニシテ輕症ナリ。

四日晴，引続キ清潔法ヲ行ヒタル為メ，略清潔トナリ。本日モ又一名ノ発病ナリ。カクノ如ニハ虎軍再ヒ来襲ノ患ヒナカラン。松本津二郎氏新聞ヲ

送ラル。

五日曇，南風強シ。清潔法ヲツクル。本日新患ナシ。午後八時高橋少尉清酒ヲ饗セラル。時恰モ去月廿日ノ新聞ヲ見ル。媾和已ニ成リタリ，愉快々々。

六日曇，午後降雨，本日新患ナシ，虎軍全滅ノ見込ナリ。

七日曇，強風正午ヨリ止ム。実父及丹波屋ヨリ書状来ル。

八日晴，我産神ノ大祭ナルヲ以テ東方ニ向ヒ遙拜ス。

九日曇，午後繫駕演習ヲナス。高橋少尉御用有之大隊本部ニ至ル。依テ分遣隊一切ノ事ヲ担任ス。

十日晴，高橋少尉大隊副官トナル。松根特務曹長来ル。

十一日晴，カクコウ鳥ノ声ヲ聞ク，午後八時雷鳴降雨。

十二日晴，杉田砲兵大尉来リ遮断解ケタト申サレタリ。官崎重寿氏 片柳辰雄氏ヨリ書状。松本氏ヨリ新聞来ル。午後ニ至リ，明日本隊ニ合スルノ命アリ。依テ準備ヲナス。

十三日曇ナリシモ九時ニ至リ晴，直ニ本隊ニ合ス。時ニ午後三時ナリ。愈平和ノ命令公然発表セリ。

十四日晴，勇氣ヲ覚フ。明日先発トシテ飯朝ノ命ヲ受ケタリ。歡喜云フヘカラス。一同羨慕ノ色アリ。其命ニ曰ク，明十五日午前七時砲子涯ニ集合シ，海津少尉ノ指揮ヲ受クヘシト

十五日曇，午前八時広島設営先発トシテ揚家屯出発，海津・野中両少尉之カ引卒タリ。牛圈子，普蘭店及五里台子ヲ経テ，午後六時唐家屯着舎営。

[本日帰朝ニ際シ舎主ニ金若干ヲ送，彼又王義之石擢ヲ送り返ス]¹⁰⁾

十六日曇，午後ニ至リ晴，暖氣太々増ル。明日午前十時出帆ノ予定ナリ。正午金州ニ至ル。同所ハ目下頗ル清潔トナリ，日本商店凡三十軒開業，就中岩谷，松本ノ如キハ支店二軒アリ。支那商店モ不殘開業，市中頗ル雜沓セリ。是畢竟日本領地トナリシ以所ナラン。午後六時柳樹屯ニ至リ舎営，湾内御用船六十余アリ。陸ニハ近衛兵及師団先発隊混入殆ント立錫ノ余地ナキカ如シ。本日行程十里強，金州ニ休憩ノ節，スシ家ニ至リ，鮎二本ヲ

食ヒ其価ヲ問フ、三十錢ナリト、其高價ニ驚ク。

十七日晴、出帆ノ豫定ナリシモ明日ニ延引セリ。近衛兵乗船ス、行ク処ヲ詳ニセス。多分台湾ナラン。柳樹屯ハ兵站監部ノアル所故ニ糧秣及諸雜貨山ノ如ク一見以テ驚ニ堪ヘタリ。我軍整頓之ヲ以テ見ルヘシ。午后二時、野中少尉引卒ヲ以テ台場ヲ從覽ス。其構造頗ル堅牢(牢)且完備セリ。巨砲四門ヲ備フ、内二ハ二十一珊知米突ニシテ二門ハ十五珊米ナリ。何レモ鋼鑢ニシテ回轉自在ナリ。彈運搬ニ供ル為メ軌道ヲ設リ。旅順ノ砲台ニ比シ増(勝)ル所アリ。入口ニ光緒十六年四月和尚島西台トアリ、我要塞砲兵操(操)鍊ヲナシ居レリ。地勢旅順ニ略似タリ。此外同一ノ砲台ニアリ。何レモ最近ノ新式ヲ採リテ以テ築造セシモノナリ。午后強風。

十八日晴、昨日強風ナリシ為メニ乗船ヲ心配セシニ、僥倖ニシテ風止ミ、頗ル穏和ノ日トナレリ。午前七時ヨリ馬ノ乗船終テ、兵員ノ乗船ヲナス。正午、先發隊悉皆乗艦船名ヲ勢徳丸ト云フ、午后一時解纜直ニ東方ニ向テ進行ス。

十九日晴、蒼海渺々一孤島スラ目ニ触ルルモノナシ。濤頗ル穏ニテ恰モ鏡ノ如ク船ノ動揺更ニナシ。宛然室内ニ坐スルカ如シ。方向ハ南方ヲ指セリ。午后一時無数ノ海豕(豚)群ヲナシテ来リ、船ノ周囲ヲ游泳シ或ハ浪ニ躍ル奇觀云フヘカラス。

廿日曇、昨夜ヨリ激浪大ニ怒リ今朝尙甚シ。為ニ朝食ヲ喫セシ者殆ント稀ナリ。生又食スル能ハス。時々怒濤船内ニ浸入ス。正午朝鮮濟州島近傍ヲ進行ス。島大ニシテ山岳嵩ク雲間ニ峙立セリ。但右方ニ見タリ。午后一時ニ至リ、浪少シク和ク左ニ巨文島ヲ見ル。

廿一日曇、午前三時対州燈台ヲ左方ニ見ル。夜中玄海灘ヲ過ク、意外ニ船ノ動揺ナシ。午前五時甲板ニ出テ遠望スルニ左右ニ島嶼数ケアリ、風景最モ佳ナリ。午前九時馬関着、檢疫ノ為定舶ス。九閱月ニシテ始メテ我日本ヲ見ル。歡喜雀躍筆紙ニ尽シ難シ。馬関門司ハ好海狭(峽)ニシテ實ニ日本ノ咽喉ナリ。馬関門司ノ間ニ巖流島アリ。茲ニ避病院ノ設置アリ。此島往昔宮本・佐々木勝敗ヲ決セシ所ナリト云フ。十時半、無恙檢疫ヲ終ル。悉

皆異状ナキヲ以テ直ニ檢疫ノ済証ヲ得、三時半拔錨、宇品ニ向フ。先発一同無異ナルヲ以テ將校以下一般上甲板ニ整列シテ第一師団万才ヲ三唱ス。廿二日晴、午前四時海上無事宇品港着、直ニ投錨、端舟ヲ以テ逐次上陸ス。正午広島市斜屋町岸彦三郎方投宿。通行ノ際市民歡迎ス。午后五時武居氏上京ス。

廿三日晴、滞在。

廿四日晴、滞在、渡清前ノ宿舍横川町山田ヲ訪問ス。

廿五日晴、即刻出発スル哉モ難斗旨通牒アリタリ。本隊ハ宇品ヨリ直行スルト云フ。

廿六日、朝来少雨ナリシモ暫時ニシテ止ム。本日午前十一時出発上京ノ途ニ付ク。目下当地ハ虎疫余程発生セリ。午后九時宇品港ニテ乗車直ニ発ス。

廿七日晴、午前四時四十分岡山着、朝食ヲナス。昨夜広島停車場ニ於テ歡迎ヲ受ク。当所ハ今猶旧城存セリ。九時五分姫路停車ス。廿分間ナリ。左方旧城アリ、頗ル壯觀ナリ。城下又一ノ大都会ナリ。十一時二十分明石駅着、左方ニ明石城跡アリ。人丸山アリ風景絶佳ナリ。左方ニ四国ヲ見タリ。舞子ノ濱及須磨ノ浦等アリテ佳麗ノ別荘多ク其風景筆紙ノ能ク及フ所ニアラサルナリ。正午、神戸着、中食、湊川神社参拝、同社ハ白木造リニシテ檜皮葺ナリ。拝殿又同シ。玉垣ハ銅板フキナリ。境内清雅忠烈ノ神靈地タルニ恥チサルナリ。三時十五分大阪着。五時十五分京都着。同停車場ハ本願寺ノ附近ナリ。同寺ハ中々壯麗ナリ。実ニ西都ハ山水明媚ノ称ニ戻ラサルナリ。午后六時大谷トンネルヲ過リ二分時間ナリ。六時五分大津着、同所ハ琵琶湖辺ニシテ頗ル好景ナリ。近江不二湖岸ニ峙ヨリ当所ニテ夕食、十時二十分大垣着、十一時十分岐阜着、十一時四十分清洲着、十二時十分名古屋着、球燈ヲ吊シ旗ヲ持テ歡迎、頗ル到レリ、市民ノ好意ヲ以テ軍隊一般ヘ酒ヲ供ス。

廿八日曇、午前四時三十五分、舞坂着、四時五十分濱松着、凱旋(門)ヲ作り歡迎ス。六時二十分天竜川ヲ渡ル。八時十五分阿倍川ヲ渡ル。此前ニ長

キトンネルニアリ。八時二十分静岡着、緑門、球燈及旗ヲ出シ歡迎ス。十時十分沼津着、昼食。午后四時五十分横濱着、歡迎中々甚大且頗ル懇篤ナリ。五時五十五分新橋着、故舊ノ歡迎者群ヲナシテ參集シ、万歳ノ声大都ニ響キ、無上ノ感動ヲ与ヘラレタリ。七時半無急牛込原町幸国寺ニ投宿ス。同日ヨリ廿五日迄滞在。[本隊ノ来着ヲ待ツ]。¹¹⁾

廿六日復員解散ノ命アリ。依テ武器被服悉皆返納ス。午后四時縦列長以下快(訣)別ノ宴ヲ開キ一同歡ヲ尽シテ解散ス、時ニ午后五時半ナリ。

廿七日大雨、昨夜親戚及故旧出迎ノ為メ上京、午前六時四谷駅停車場ヲ発シ歸郷ノ途ニ就ク。立川停車場ニ至レハ已ニ歡迎者十数人来着セリ。暫時休憩ノ上同所ヲ発シ、道ヲ青梅線ニ取ル。已ニシテ青梅停車場ニ至ルヤ、故山ノ歡迎者数十人大雨ヲ冒シテ来リ各自胸間ニ歡迎ノ徽章ヲ帶ヒ数流ノ大旗ヲ押立テタリ。又青梅町有志者ハ特ニ休憩所ヲ設ケ数流々旗樹テ、軒々球燈ヲ吊ス等実ニ枚挙ニ遑アラス。¹²⁾ 其他遠近ノ有志者及親戚故旧歡迎者總テ參集シ数百人ナリ。一同万歳ヲ唱フ。其盛大壯觀ナルコト筆紙ノ能ク及フ所ニアラサルナリ。¹³⁾ 同所有志者ノ歡迎会ニ臨ミ数時ニシテ同会ヲ辞シ、故山一般ノ歡迎諸氏ニ擁セラレハ故山ニ皈ル。時ニ午后九時ナリキ。我大神ノ社前ニ於テ一同祝盃ヲ傾ケ万歳ヲ三唱ス、シテ解散ス。実ニ本日ノ如キハ余畢生ノ名誉ニシテ沿道至ル所非常ノ歡待ヲ受ケ感涙ニムセブコト往々ナリシ。本郡歡迎ヲ受シ者其数多シ雖モ小生ノ如キ体(待)遇ヲ受ク者ナシト云フ。諸君ノ懇篤豈肝銘ノ至リ 破損により不明 ヤ。

お わ り に

片柳鯉之助は、凱旋してから一年余というもの、各地を訪れて日清戦争体験記を話すなどしたという。その後は、御師のかたわら長きにわたり村会議員を務め、学務委員としても活躍するなど、村の重鎮として大きな働きをした。とくに、日露戦争後は、戦役記念碑をつくるさいなど、みずか

ら日清戦争での旅順攻略のさいにまみえた乃木希典を訪い、その揮毫をおおぎ、鯉之助みずからが石に刻んだところの記念碑をつくった。その一つは今もなお御嶽神社の社前にある。このように晩年の鯉之助は、忠魂碑をはじめとする石刻に心をよせ、細工物に時を費していたとのことであるが、その胸中には戦場での思いが去来していたらしい。明治天皇の崩御と乃木の殉死は、鯉之助に大きな衝撃をあたえ、文字通りに一年の喪に服したという。鯉之助の晩年は、石や木に細工する男の姿を思うとき、何かさびしさにおおわれた男の翳を感じさせる。

鯉之助は、孤寥の影をおい、大正7年6月17日、52歳で亡したが、その死因は石を彫りすぎて石塵を吸いすぎたためか珪肺病の症状に似ていたとのことである。子供は一女七男であるが、長男徳太郎を明治44年3月12日に12歳で亡くしたため、家は次男健二郎が嗣いだ。ここに簡単に片柳鯉之助の生涯と家庭について記し、『遠征日誌』の紹介をおわることとする。

なお、本稿をなすにあたっては、片柳健二郎氏をはじめ、青梅市文化財保護委員須崎直衛氏、東京百年史編集事務局のかたがたのお世話になった。ここに記して謝意を表したい。(1972年7月18日成稿、10月15日改稿)

〔注〕

- 1) ここでいう「戦史」とは旧陸軍の戦史研究をうけつぐ防衛庁戦史室の一連の刊行物をさす。また、軍事史とは『日本の軍国主義』（東大出版会）をはじめとする井上清の業績や藤原彰『軍事史』（東洋経済新報社）にみられるような日本軍国主義の告発をめざす社会科学的諸研究を意味する。
- 2) 日露戦争に関しては色川大吉「日露戦争下のある農民兵士の記録—大沢上等兵戦中日記一」（東京経済大学「人文自然科学論集24」所収）が日露戦争に対する一農民兵士の日記を紹介している。日清・日露戦争への従軍記は各戦役後に多く刊行されているが、そうした一連の従軍記とこれら発掘された兵士の記録との比較検討を進めることこそは今後の大きな課題といえよう。拙著『明治の墓標—「日清・日露」—埋れた庶民の記録—』（秀英出版）はこうした諸記録をもとに日清・日露戦争を描こうとしたものであり、東京を中心に日清・日露戦争を検討したものとしては『東京百年史 第三巻』所収の拙稿「戦争と市民」、「兵士たちの動向」、「市民生活の逼迫」などがある。

- 3) 死者の貌ともいふべきものについては、黒羽清隆「15年戦争における戦死の諸相—「統計」と「歌」と—」(思想71年8月)や上野英信『天皇陛下万歳—爆弾三勇士序説—』(筑摩書房)をはじめ、さきの拙稿などがある。とくに、上野英信の仕事は日本人の「天皇信仰」の核にせまるすぐれた分析をした書として重要である。
- 4) 拙稿「戦争と市民」(『東京百年史 第三巻』所収)、拙著『明治の墓標』(秀英出版)参照。
- 5) 石光真清『城下の人』(竜星閣) 247頁参照。
- 6) 陸軍省編『明治軍事史 上巻』(原書房) 913頁。
- 7) 乃木の雄姿については拙著『乃木希典』(雄山閣) 参照。
- 8) クリステイー、矢内原忠雄訳『奉天30年』(矢内原忠雄全集 第23巻 岩波書店所収) 114頁。
田庄台の戦闘は日本軍の兵力約1万9000・砲91門、清国軍の兵力2万、砲約40門で戦われ、清国軍が戦場に遺棄した屍体は約1000。日本軍の戦死者は16、負傷者は144(後に死8)名という状況だった。
- 9) 片柳は、戦後に凱旋してから一年余というもの、近隣諸地域の知友にまねかれ、戦争談をして歩いたという(次男片柳健二郎氏談)。また、おりにふれて日清戦争に関する戦記ものを読むなどして、自己の戦争体験を追体験することとした。こうしたなかで形成された戦争像こそが民衆のなかでかたりつがれた「戦争」にはかならない。このような「戦争」像を解明するためにも、個々の兵士の戦争体験を確認しつつ、その体験をもとに生み出された「戦争」への認識をおさえる作業は重要である。
- 10) []内は朱筆。後に片柳鯉之助が加筆したものとおもわれる。
- 11) []内は抹消されている。
- 12) 「実ニ枚挙ニ遑アラス」の文は、もと「準備中々整頓セリ」となっていたものを抹消、修正したもの。
- 13) 「筆紙ノ能ク及フ所ニアラサルナリ」は、もと「枚挙ニ遑アラス而シテ」となっていたものを抹消、修正したもの。